

自然農法の目指す未来

(公財) 自然農法国際研究開発センター
理事長 岩石 真嗣



新元号が「令和」と決まりました。いろいろな方が、この元号の意味を解説しています。例えば、日本語研究者の金田一秀穂氏によれば、『令』とは、古い意味では神様のお告げ。『和』は皆が仲良く」ということになるようです。混迷する時代にあつて、自然(神様)からの「皆仲良くしなさい」というお告げでしょうか。

農業においては、これまで農薬や化学肥料を生み出した科学技術の発達が食料増産に役立ってきたことは事実です。しかしいろいろな虫や草に農薬という武器を使って一方的に攻撃するのではなく、お互いが共に助け合う関係を探り、総体として豊かになる道を探ることが自然(神様)のお告げに適った新時代の農法となるのではないかと思えます。

新聞報道によれば、外務省は「令和」の意味を海外に伝える際に「Beautiful Harmony 美しい調和」

という趣旨であることを説明するよう在外公館に指示しています。

岡田茂吉は「調和の理論(一九五二)」において「この大宇宙の一切はことごとく調和している、寸毫も不調和はないのである。したがって人間の目に不調和に見えるのは表面だけの事である。何となれば不調和とは人間が作ったものであつて、その原因は反自然の結果である。すなわち大自然からいえば、反自然によつて不調和ができるのが真の調和であり、これが厳正公平な真理である。」と解説しています。

この理論を自然農法にあてはめてみると、病気や争いという不調和を生み出す原因に気づき、正していくことが、農法を完成させる要点となるのではないかと思えます。病虫害や雑草を一方的に有害とする人間の利己的な思いや行動が農地生態系内の物質循環の滞りや偏りを引き起こし、栽培上の諸

問題が発生すると認めれば、これらの解決は楽になります。病虫害と戦い競争するよりも、役立て、共生する方が合理的な解決策だからです。

価値観や常識を転換し、自然の一員として根本の原因を見直せば、総体の利益を図る正しい仕組みが生まれます。

総合防除(Integrated Pest Management)は農薬だけに頼らずに雑草害や病虫害を防ぐ考えです。一人勝ちを目指す解決方法(農薬)に依存せず、生態系全体を健全な未来へと合理的に導く根本的な問題解決が持続的発展のゴールです。

美しく豊かな自然生態系は循環的に共生し統合(Integrate)され、無駄がなく合理的です。その統合性(勿体)を失うことを「勿体無い」といいます。農地において多様な植物と微生物・昆虫との共生関係を育むことで農地生態系の総

合力を引き出すことこそ自然農法の指針です。

相手を思いやる心は「美しい調和」を生む力であり、天にも通じる誠心の姿勢です。農業を通して自然の生産力を利用する能力を与えられた人類は、健全な地球を目指し、思いやりの心で植物や動物などの生命を扱い、生物間の共生関係を調和に導く役割があるはずす。

当センターは自然農法を生業として成立させる無農薬・無肥料の科学的な研究開発事業をすすめます。そして農業における病気や争いを収める過程で、紛争や貧困を解消する社会的な課題とも向き合い、生き方・暮らし方が自然と調和した状態を目指します。

新時代の幕開けにあたり、皆様方の益々のご健勝とご活躍を祈念いたしますとともに、未来の自然農法に向けて引き続きご支援を賜りますよう、衷心よりお願い申し上げます。